参考資料

第10回富士山世界文化遺産学術委員会における主な意見（２月15日）

１　保全状況報告書案について

（１）ヴィジョンに基づく各種戦略の進捗状況

- 2 ページの取組の構造を示す図が、イメージ化されすぎて、逆に分かりにくい。真ん中に富士山本体と他の構成資産をサテライト的につないだ「ひとつの存在」があり、その周りに「文化的景観」がある図の方が、イメージしやすい。
- 一合目から五、六合目位までの植物で緑色に見えている部分は、本当に大事な場所であり、どう保全していくかをヴィジョンに記述した方が良い。
- 「ひとつの存在（an entity)」や「ひとつ（一体）の文化的景観（a cultural landscape)」という言葉が分かりにくい。日本語では、「一体として捉え、総合的（統合的）観点から管理する」などとすべき。また、緩衝地域も含めて一体として捉え、総合的観点からしっかりやっていると、日本語として強く表現すべき。

（２）下方斜面の巡礼路の特定

- 巡礼路沿いの信仰関連施設の適切な保全が必要である。
- 細かい巡礼路の所在を明らかにするだけでなく、代表的な巡礼路を辿りつつ、大事な部分の遺跡の保全に繋げていくことが大切である。

（３）来訪者管理戦略

- 目標の定め方などが改善されて、非常に良くなった。
- 登山者数は、これを１人でも超えれば規制すると誤解されないよう説明し、しっかり調査をした結果、著しい混雑が生じないよう、こうした指標で考えるということを理解していただいた上で、対策に取り組む必要がある。
- 著しい混雑は極めて限定的な日にち、時間、場所で発生しており、それをどう避けるかという所にポイントがあることが明確になったのは、非常に大きな成果。
- 分散化に向け、去年の夏の混雑予想カレンダーは比較的有効だったのではないか。混雑予想カレンダー等の情報提供やシャトルバスの運行時間の見直し、マイカー規制などに、引き続き力を入れて欲しい。
- 御来光は、頂上まで行かなくても山小屋や五合目などでも見られることなど、情報提供の具体的な内容、方法を両県で工夫して欲しい。
- カレンダーの戦略はうまくいっている。富士山へのアプローチ道路の混雑情報などと合わせて発信できれば、なお良い。

- ごみを見掛けた登山者の割合やトイレなどで不便を感じた登山者の割合は、いずれは、1 割以下にすることを目標に進めるべき。不満を持つ人はなるべく少なくすべき。

（４）上方の登山道等の適切な保全手法

- 導流堤の側面の修景は難しいが、強度と景観の両方の観点から、どのようなものが良いか、研究課題として取り組んで欲しい。
- 長期的な視点で、富士山らしい山小屋の在り方を研究し、実践に移してもらいたい。屋根は両勾配よりも片流れの方が土石流を受け流しやすいのではないか。

（５）情報提供戦略

- 富士山世界遺産センターは、構成資産の一体化したつながりに関して調べると同時に、信仰・芸術に関するさまざまな価値を外国の方も含めて人々に知らせるという非常に重要な役割がある。

（６）危機管理戦略

- 集中豪雨などによる水害についても考慮すべきではないか。
- 富士山は外国人の観光客・登山者が多いため、連絡先を把握するためにも、山頂を目指す人はアプリなどを使って全員登録することを検討する必要がある。併せて、協力金の義務化も検討することが必要なのではないか。

（７）その他

- 具体的な参考資料がついており、写真も使われて大変分かりやすいが、できるだけ富士山が写っているものを出した方が、よりわかりやすいのではないか。

２　その他

- 学術委員会の基本的な仕事は、報告書を作ることではなく富士山の現実的・具体的な管理について助言することであり、具体的な活動や今後の管理に向けた対策についてそろそろ乗り出していかなければならない。